

これらの結果から、公立学校の教科面での学習指導の力が落ちている可能性が推測できる。塾に頼らず、学校中心に学習をしている子どもだけを見た場合、八九年に比べ〇一年での基礎学力の落ち込みが大きくなっているからである。たしかに、ペーパーテストで測られた「旧学力」に過ぎないのかもしれない。それでも、「新しい学力観」導入前の八九年には平均正答率が七、八割であった基礎的な問題さえ十分解けないケースが、学校だけに頼って学習を続ける子どもたちの間で拡大しているのである。

この結果を別の面から見れば、塾に行く者と行かない者・行けない者との格差が拡大する傾向にあるということである。特に中学校の数学では顕著である。中学生の通塾率は約五割であるが、塾に行っていない半分の生徒たちは、数学の学習事項を習得する上で以前よりきびしい状況に置かれるようになった。本来、基礎学力を下支えする主役であるはずの公立学校が、その役割を弱めているのである。

もう一つ注目には値するのは、小学校算数の結果である。通塾グループの点数が、八九年の八四・六点から〇一年の七三・〇点へと十一点あまり低下している。八九年の非通塾グループの点数が七八・九点だったことと比べると、「今の塾に通う子」は「かつての塾に通わなかった子」よりも、平均点で六点ほど低い。八九年の小学校の教室では、今よりずっとみっちり算数の基本的事項を指導していたのだろう。あるいは、塾の多様化戦略のもとで補習塾に通う小学生が増えたことを、この数値は反映しているのかもしれない（ただし、前述の通り通塾率は上がっていない）。

即断はできないが、この結果は、第一に、「塾へ行けば万全」とは決して言えないこと、第二に、学校における授業のやり方を工夫・改善しさえすれば、八九年時点のように、塾に頼らなくても、子どもたちの基礎学力が再びアップする可能性があること、そして第三に、それとは反対に、学校における教科の指導力がさらに低下していけば、塾に行ったとしても学力の保障が難しくなることを示唆している。まさに、学校の教え方、教科指導の力が問われているのである。

4. 算数・数学の学力はどう変化したか

(1) 小学校算数の低下の特徴

ここまでは、全体の傾向をみてきた。つぎに、教科別に詳しく結果を見ていくことにしよう。

表1-4に小学校算数の領域別の平均得点を示した。ここでは学習指導要領の分類に従い、〈数と計算〉〈量と測定〉〈図形〉〈数量関係〉の四つの領域別に見た。また、〈数と計算〉に関しては設問数が多かったため、サブ領域として、数の意味や表し方について

の理解をみる<概念>と、
 こうした概念の理解を実際
 に使えるかどうかの技術を
 みる<計算>とに分けて検
 討した。

この表から、算数の学力
 低下はすべての領域でおき
 ていることがわかる。低下
 の幅は、七点~十九点であ
 る。また、<数と計算>よ

りも、<量と測定><図形><数量関係>の三領域での低下が大きい。昨今、「旧読み・書
 き・算の学力低下」が話題になり、計算を中心とするドリル学習などが行われる傾向を耳
 にする。しかし、実際の算数の学力低下は、より広範な領域でおきている。したがって、
 <数と計算>以外の領域にも注目する必要がある。

つぎに、<数と計算>領域をより詳しく見ると、<分数>と<小数>とで異なる傾向を
 示す。表1-5は、<分数>と<小数>それぞれの<概念>と<計算>について平均得点
 を比較したものである。興味深いことに<小数>では<計算>の方が、<分数>では<概
 念>の方がより低下している。

表1-4 小学校算数の領域別の平均得点 単位：「点」


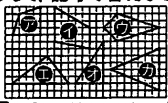
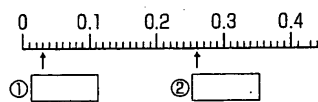
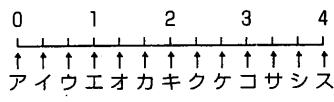
	問題(例)	89年調査	今回	差
数と計算 (概念)	10億が3こ、100万が7こ、10万が5こ、 1万が4こ、100が1こ、10が6こあつまっ てできる数を数字でかきなさい。	81.5	74.7	-6.8
数と計算 (計算)	2684-1389の計算をひっさんでしな さい。	86.0	77.8	-8.2
量と測定	右のような正方形があ ります。面積を求めな さい。 	71.7	56.3	-15.4
図形	つぎの図形の中から、台形と二等辺 三角形をさがして、記号で答えなさい。  ① 台形 <input type="checkbox"/> ② 二等辺三角形 <input type="checkbox"/>	79.2	65.6	-13.6
数量関係	50円切手4まいと、70円切手3枚をか いました。いくらはらえばいいですか。 式をかいてときなさい。	81.2	62.7	-18.5

表1-5 <小数>と<分数>の領域別の平均得点

問題(例)	小 数			分 数		
概念	つぎの数直線上の↑の数を小数で 書きなさい。  ① <input type="text"/> ② <input type="text"/>			つぎの分数は、数直線のアースのどれ にあたりますか。記号で答えなさい。  ① $\frac{2}{3}$ () ② $\frac{4}{3}$ () ③ $2\frac{2}{3}$ ()		
計算	つぎの計算をひっさんでしなさい。 $5.12+12.8$ $12.24-1.2$			つぎの計算をしなさい。 $3\frac{2}{9} + \frac{5}{9}$ $4\frac{3}{5} - 3\frac{1}{5}$		
平均得点	89年	01年	差	89年	01年	差
概念	91.1	88.0	-3.1	74.1	64.4	-9.7
計算	82.2	69.0	-13.2	84.3	83.1	-1.2
差	8.9	19.0		10.2	18.7	

単位：「点」

数直線上に小数や分数を位置づける問題（これにより<概念>としての理解度がわかる）
 の場合、子どもたちにとって、小数よりも分数のほうが難しい。それに対し、計算におい

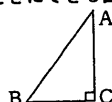
ては、分数よりも小数の計算を子どもたちは苦手とする。「分数のできない大学生」が話題になったが、小学校段階で見ると、できなくなったのは計算よりも、分数の概念的な理解である。

また、今回の学習指導要領での内容削減では、小数の計算を苦手とする子どもたちを考慮してか、小数点以下二ケタの計算をはずし、「円周率は三・一四」ではなく、「およそ三」として計算する方針が打ち出され話題となった。これまでの教育を通じて、すでに小数の計算の苦手な子どもが増えているという今回の結果からすれば、苦手なものをさげ、扱わなくなれば、ますますこの傾向が助長されることが予想される。実態把握を怠ったまま指導要領の改訂を行ったことのツケが回る可能性があるのだ。

(2) 中学数学の低下の特徴

では、中学校の数学はどうか。表1-6は数学の領域別の結果である。小学校と同様の観点で、〈数と式〉〈数量関係〉〈図形〉を設定し、〈数と式〉のサブ領域として〈正負の数〉〈文字と式〉〈方程式〉を設定した。

表1-6 中学校数学の領域別の平均得点

		問題(例)	単位:「点」																	
			89年調査	今回	差															
数 と 式	正負の数	次の計算の答えとして正しいのはどれですか。 $(-7) \times (+6)$ ① -46 ② -42 ③ -1 ④ 42 ⑤ 46	77.4	74.0	-3.4															
	文字と式	次の計算の答えとして正しいのはどれですか。 $5(2x-1)-(x-6)$ ① $9x+1$ ② $9x-11$ ③ $9x+5$ ④ $9x-1$ ⑤ $9x+11$	67.2	61.6	-5.6															
	方程式	次の方程式の解として正しいのはどれですか。 $2x-5=4x-2$ ① $x=\frac{3}{2}$ ② $x=-\frac{7}{2}$ ③ $x=-\frac{7}{6}$ ④ $x=-\frac{3}{2}$ ⑤ $x=\frac{7}{2}$	73.5	64.4	-9.1															
図形	下の図の直角三角形ABCを、ACを軸として1回転させたときにできる回転体の名前として正しいのはどれですか。  ① 円柱 ④ 三角すい ② 球 ⑤ 円すい ③ 二等辺三角形	61.7	61.5	-0.2																
数量関係	次の表は、xとyの比例関係を表したものである。 □に適する値として、正しいのはどれですか。 <table border="1" data-bbox="566 1590 901 1668"> <tr> <td>x</td> <td>...</td> <td>□</td> <td>...</td> <td>-2</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>...</td> </tr> <tr> <td>y</td> <td>...</td> <td>-18</td> <td>...</td> <td>-6</td> <td>0</td> <td>9</td> <td>...</td> </tr> </table> ① 6 ② -6 ③ -21 ④ -4 ⑤ -54	x	...	□	...	-2	0	3	...	y	...	-18	...	-6	0	9	...	60.7	57.7	-3.0
x	...	□	...	-2	0	3	...													
y	...	-18	...	-6	0	9	...													

算数同様、中学の数学でも、すべての領域で基礎学力が低下している。その幅は、一〜十点であり、算数ほどは大きくはない。領域別で低下の幅が大きいのは〈数と式〉で、領域内でも〈正負の数〉→〈文字と式〉→〈方程式〉と学習段階が進むにつれて、低下の幅は、二倍、三倍と大きくなる。

特に低下の大きかった〈方程式〉について詳しくみよう。図1-3は方程式の問題別に、

「正答」「誤答」「無答」の割合を示したものである。低下の幅は、 $2X-5=4X-2$ や $4X+3=5$ のように、方程式の解が分数となるもの、続いて $0.5X-1=0.3X+0.2$ や $\frac{X+1}{3} = \frac{-X-3}{2}$ のように、問題の式に小数や分数が含まれているものの順に広がっていく。

答えを何も選ばなかった「無答」率に着目すると、八九年調査と比較して、どの問題でも「無答」の生徒が増加している。問題は、答えを五つの選択肢から選ぶ方式をとっている。にもかかわらず、当てずっぽうでもいいから答えを書く生徒が減り、何も書かない生徒が増えている。何を選べばよいのかもわからない、いわば「お手上げ」状態ともいえる生徒が増えている可能性がある。

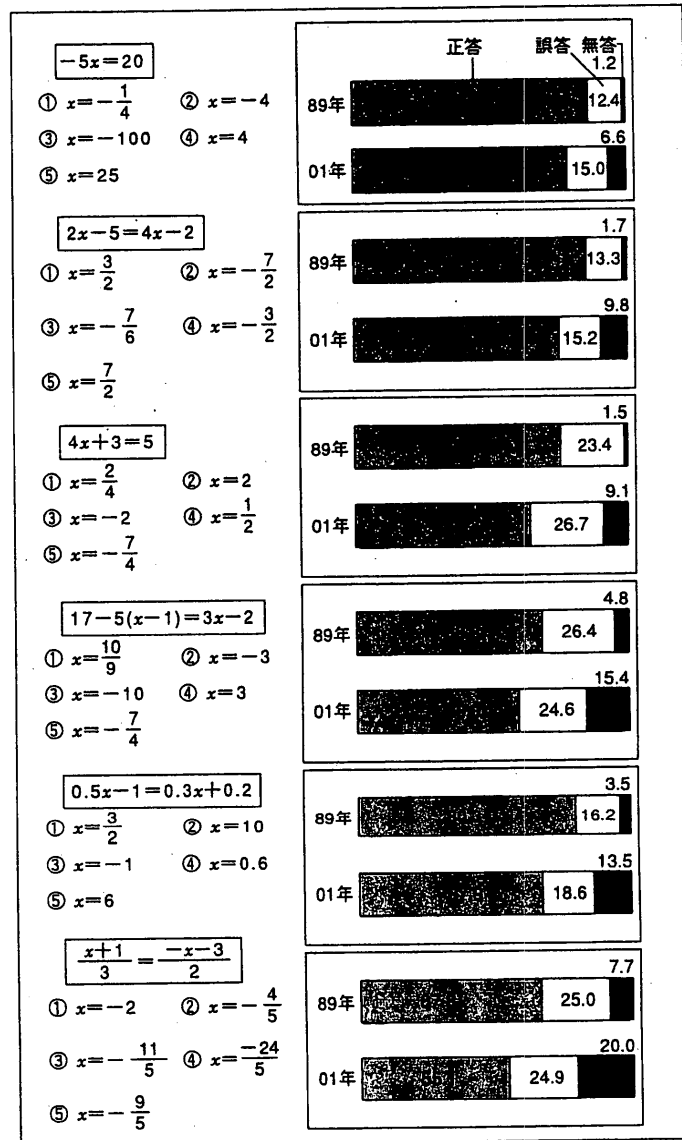


図1-3 <方程式>の問題別の「正答」「誤答」「無答」の割合

(3) 塾の影響

それでは、こうした算数・数学の学力低下傾向のもとで、塾に通うことはどのように影響しているのか。表1-7は、領域ごとに、通塾グループと非通塾グループの平均得点を示したものである。通塾の有無による平均得点の差は、小学校の算数では、いずれの領域でも八九年より今回の方が小さくなっている。特に、<量と測定>、<数と計算>の<概念>、<数量関係>の領域で大きく縮まっている。

なぜ、このようなことがおこったのか。表1-7右端の二つの欄をみていただきたい。これは、八九年調査と今回での、通塾グループ同士、非通塾グループ同士を比較したもの

表1-7 算数・数学の平均得点と通塾・非通塾の関係

単位：「点」

	89年			01年			差の差	89年と01年の差		
	通塾	非通塾	差	通塾	非通塾	差		通塾同士	非通塾同士	
算数	数と計算(概念)	85.1	80.0	-5.1	75.9	74.4	-1.5	-3.6	-9.2	-5.6
	数と計算(計算)	89.5	84.5	-5.0	81.0	76.5	-4.5	-0.5	-8.5	-8.0
	量と測定	77.6	69.3	-8.3	58.4	55.5	-2.9	-5.4	-19.2	-13.8
	図形	82.5	77.8	-4.7	68.5	64.3	-4.2	-0.5	-14.0	-13.5
	数量関係	85.3	79.5	-5.8	65.4	62.0	-3.4	-2.4	-19.9	-17.5
数学	正負の数	82.4	71.6	-10.8	81.6	66.3	-15.3	4.5	-0.8	-5.3
	文字と式	73.7	59.7	-14.0	71.3	51.5	-19.8	5.8	-2.4	-8.2
	方程式	80.8	65.2	-15.6	75.5	53.0	-22.5	6.9	-5.3	-12.2
	数量関係	66.8	53.9	-12.9	65.8	49.3	-16.5	3.6	-1.0	-4.6
	図形	68.6	54.3	-14.3	70.4	52.4	-18.0	3.7	1.8	-1.9

である。小学校では非通塾より通塾の方が平均得点が低下している。原因は不明だが、たとえ塾に行っている、現在の小学生は、領域を問わず、十年前に塾に行っていなかった子どもの平均点に及ばない。つまり、小学生の場合、塾に行っている、今回調査した算数すべての領域で、十二年前に比べ十分な学力が維持できていないのである。塾に行っていない子どもの学力の落ち込み以上に、塾に行っている子どもにも大きな学力の低下が生じているために、通塾の有無による格差が縮小したのだ。

これに対し、中学数学の場合、いずれの領域でも通塾と非通塾の平均得点の差は広がっている。領域別で低下の幅が大きかった〈数と式〉の領域では、〈正負の数〉四・五点→〈文字と式〉五・八点→〈方程式〉六・九点と、学習段階が進むにつれて、差が広がる傾向にある。

また、通塾グループ同士を比べると、〈図形〉では差が小さいものの、他の領域では、四点～十三点の平均得点の低下が確認される。通塾グループの低下は一～六点以内であり、非通塾グループ同士の低下のおよそ半分に抑えられている。とくに、非通塾者の平均点の低下は、〈文字と式〉では八点、〈方程式〉では十二点になり、抽象性が高まり数学的な要素が強まるこうした領域で、この間、公立学校での教育だけに頼っていた生徒の学力低下が著しいことが伺える。

5. 国語の学力はどう変化したか

(1) 「長文読解」「文法」の低下

すでに全体の分析のところで示したように、国語においても八九年調査と〇一年調査では、設問ごとの正答率が全般的に低下していた。それでは、一体、どのような国語の力が